

研究主題「集団活動場面での個別指導計画を活用した支援の在り方

－幼稚園における特別支援教育コーディネーターの役割の工夫－

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

千代田区立ふじみこども園 主任教諭 小林 晶子

第1 研究のねらい

特別支援教育では、個別指導計画を作成し十分に活用することで、個々のニーズに応じた支援を実施することが大切である。しかし、特別な支援を必要とする幼児は、集団活動への適応の難しさから、活動場面にふさわしくない行動を表すことがあり、それに対してこれまで幼稚園で見えてきた対応の中には、担任がどのように支援したらよいか分からず、注意を繰り返したり、対応しきれずにそのままにしておいたりするなど適切な支援とは言えないものもあった。

特別支援教育体制を整備し、対象の幼児・児童・生徒のニーズに応じた支援を行うためには、各校・園の特別支援教育コーディネーター（以下、「コーディネーター」と表記。）がその役割を果たすことが大きな意味をもっている。特に幼稚園は、特別支援学級の設置がなく、教職員組織も小規模である。また、幼稚園は遊びを通しての学びの場であり教科指導の小学校などと異なるため、幼稚園としてのコーディネーターの役割を一層明確にする必要がある。

そこで、個別指導計画の作成と活用を促し、対象幼児のニーズに応じた支援の改善を図るために必要な、幼稚園のコーディネーターとしての役割の工夫を明らかにすることを研究のねらいとした。

第2 研究仮説

特別支援教育コーディネーターがその役割を明確に認識し、工夫して担任の個別指導計画を活用した支援方法の改善を促すことで、対象幼児が集団活動場面でよりよく力を発揮することができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 特別支援教育の対象

従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含み、また、障害の医学的診断の有無にかかわらず、何らかの特別な支援を必要とする幼児とする。

(2) 幼稚園におけるコーディネーターの「役割」と「役割の工夫」について

コーディネーターの役割は教育活動の各プロセスで関わり合う人をつなぎ、その力を幼児の支援に結び付けることである。具体的な「役割」は、「担任への支援」、「園内の関係者や関係機関との連絡調整」、「園内委員会での推進役」、「保護者に対する相談窓口」、「障害のある幼児についての理解・啓発」、「巡回相談員や専門家チームとの連携」の6つであると捉えた。

また、それらの役割を行う上で、幼稚園の状況（教職員組織、保育時間、勤務形態など）や園の特別支援教育の状況〔特別な支援を必要とする幼児の人数や実態、保護者や教職員の実態（理解度、協力体制）、園内外の人的資源の状況〕を考慮した取組を「役割の工夫」とする。

(3) 個別指導計画について

計画（Plan）、支援の実施（Do）、評価（Check）、改善（Action）のPDCAサイクルにより、指導の改善につなげる活用が大切である。

2 調査研究（7月下旬～9月上旬実施） 対象：東京都特別区公立幼稚園 145 園 教員

（各園のコーディネーター及びそれ以外の担任）130 件回収（回収率 90%）

(1) 特別な支援を必要とする幼児の現状

「1 基礎研究(1) 特別支援教育の対象」を示した上で、「特別な支援を必要とする幼児が在籍する」と回答したのは表 1 のように 96%の園であり、その幼児数は総園児数の 7.1%の割合であった。

また、特別な支援を必要とする幼児は、集団活動場面で「相手の思いや状況が捉えにくくトラブルになりやすい（86%）」「場面の切り替えが難しく集合時に集まらない（82%）」（n=130）などの行動を表しているという回答を得た。

これらの行動は、幼児期という年齢・発達や経験の少なさから生じているとも考えられるが、発達障害の場合の行動特徴に似ていることから、発達障害を視野に入れた支援方法を行っていくことが必要である。その場合に、発達障害かどうかを問題にするのではなく、適切な支援方法を考えることが重要である。

(2) 特別な支援を必要とする幼児が在籍すると回答した担任の幼児に対する支援の現状

「集団をまとめる中で個別の支援を行うことが難しい（53%）」「どのように支援したらよいか分からない（43%）」という回答が多かった。（n = 113）

(3) コーディネーターの現状

130 園中 117 園（90%）がコーディネーターの指名を行い、そのコーディネーターの 82%が担任をしている教員であることが分かった。そのため、「他の学級の特別な支援を必要とする幼児の実態や支援の現状を把握することが難しい（56%）」、「専門性がなく他の教職員への助言が難しい（40%）」と回答した。さらに、今年度コーディネーターに指名された教員（n = 55）の 60%が「コーディネーターとしてどのような仕事をしたらよいか分からない」と回答した。

(4) 個別指導計画作成や活用状況（表 2）からの考察

作成を任されている担任は「① 時間や労力を要する」という課題を感じており、それは「② 目標設定が難しい」や「③ 適切な支援方法が分からない」が影響していると考えられる。

また、「目標」や「評価」の記載欄がない園があり、次の改善につなげる活用は十分でないと考えられる。

3 開発研究

基礎研究と調査研究を踏まえ、コーディネーターが役割を果たし、個別指導計画の作成と活用を促すとともに園内及びエリア・ネットワークの連携を強化しながら、教職員の特別支援教育の理解と実践力を高めるよう、以下の開発を行った。

(1) コーディネーターの活動内容を示す資料の作成

資料には、コーディネーターの具体的な活動内容を示した。また、コーディネーターが担任をしている実態から、コーディネーターだけでなく、園内で組織的に行う参考事例を示した。

表 1 特別な支援を必要とする幼児の在籍状況

	特別な支援を必要とする幼児の在籍の有無		総園児数	特別な支援を必要とする幼児数	園児数に対する割合
	有	無			
計	125 園 96%	5 園 4%	9,873 人	704 人	7.1%
合計	130 園		全 130 園中 5 園が無回答		

表 2 個別指導計画作成・活用状況

<作成者> (n=93)
※下記から複数選択されている場合あり
・担任 (95%)
・コーディネーター (4%)
・園内委員会 (9%)
<作成・活用上の課題> (n=93)
①時間や労力を要する (72%)
②目標設定が難しい (47%)
③適切な支援方法が分からない (40%)
<記載事項> (下記から該当事項複数選択)
・課題となる実態 (98%)
・興味・関心、得意なこと (74%)
・長期目標 (65%) ・短期目標 (79%)
・支援方法 (90%) ・評価 (61%)

(2) 個別指導計画の活用による支援の改善

① 個別指導計画の様式の開発 (図 1)

指導の改善につながるように「目標」や「評価」の欄を設定するとともに、支援方法の追加や修正を追記できる様式にした。また、対象の幼児の実態を多面的・多角的に捉えるように「よさとして生かせること」の欄を設けた。

② 「個別指導計画作成支援ソフト【幼稚園版】

の開発 (補助資料参照)

「東京の教育 21」研究開発委員会、平成 17 年度〔通常の学級「個別指導計画」部会〕で、小・中学校向けに開発された「個別指導計画作成支援ソフト」を参考にして個別指導計画作成支援ソフト【幼稚園版】

作成年月日		園名	
個別指導計画 (学期用、 期用)			
ふりがな	性別	在籍学級	
氏名	作成者氏名		
幼児の実態			
課題となる実態		よさとして生かせること	
保護者の願い			
長期の目標			
幼児の実態	目 標	具体的な支援	評 価
追加・修正	追加・修正	追加・修正	
追加・修正	追加・修正	追加・修正	
専門家の意見			
: { / }			
: { / }			

図 1 個別指導計画の様式

(以下、「支援ソフト」と表記。)の開発を行った。「特別な支援を必要とする行動」に対して支援ソフトが提示する「支援のヒント」を参考に個別指導計画を作成できるようにした。

③ 特別支援教育の園内体制の充実と教職員の知識・理解を促すための支援ソフトを活用した仕組みの開発

図 2 のように支援ソフトを活用して園内体制の充実とエリア・ネットワークの連携強化を図るとともに、支援ソフト情報の追加・更新をする中で職員の様々な

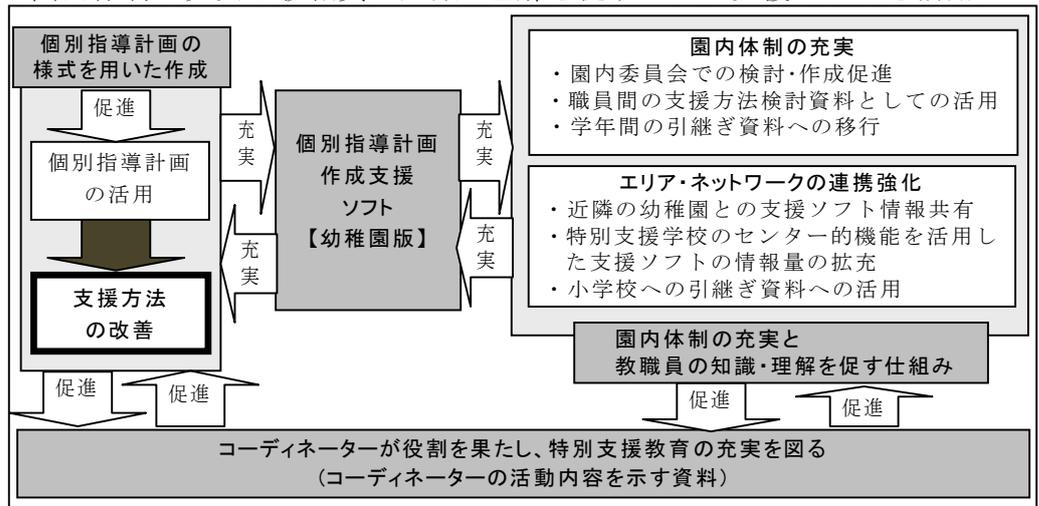


図 2 開発研究を活用した支援方法の改善

ケースに対応した支援方法についての知識・理解を図れるようにした。

4 検証保育 (7月・9月・11月実施)

対象幼児 (5 歳児、医師による自閉症の診断有) の在籍する学級の担任と特別支援教育支援員 (以下、「支援員」と表記。) を対象に、園のコーディネーターとしてケース会議を計画・運営した。会議の中で、支援ソフトを活用して支援方法についての具体的な提案をし、共に目標設定をするなどの担任への働き掛けを行った。

対象幼児が困難さを表しやすい集団活動場面を設定し、「ルール理解」「他者とのコミュニケーション」「活動の持続」についての支援方法を中心に担任への働き掛けを行った。検証保育では、その中でも特に、自閉症の特性である社会性に関する困難さを踏まえて、「他者とのコミュニケーション」能力の向上を目指しながらその行動に着目して観察した。

担任がコーディネーターの働き掛けを受ける前後の、対象幼児への支援方法及び対象幼児の集団活動への取組の変容 (表 3) から仮説を検証した。

表3 検証保育における「コーディネーターの働き掛け」「対象幼児への支援」「対象幼児の姿」一覧

7月13日コーディネーターの働き掛け前 逃げる役の子が付いた2人組の前の子が次に逃げる役になる鬼遊び	活動内容	9月25日の活動 ジャンケンカードを集めよう！ 他のグループの幼児とジャンケンで対戦して集めたカードの数で勝敗を競う活動	11月1日の活動 ジャンケンカードを集めよう！ グループごとにジャンケンで出すものを決めて行うゲーム
【園の支援体制】 改善点 対象幼児の個別指導計画を作成して支援をしているが、実態や障害特性に応じた目標、支援方法の設定が難しい様子がある。	コーディネーターの働き掛け	改善点を受けた働き掛け ・担任や支援員から対象幼児の実態を聞き取り、一緒に目標を設定。 ・支援ソフトを活用し、障害特性を踏まえた支援提案及び教材提供（他者との関わりを具体物で行う、ジャンケンのタイミングが分かり自ら行動できる場合）。	改善点を受けた働き掛け ・9月25日の評価から、対象幼児の実態と目標設定を、担任や支援員と再検討。 ・対象幼児の活動参加の環境要因になる、周囲の幼児の対象幼児への関わり方に焦点化した話し合いの実施。 ・対象幼児の得意なことを生かす場面設定の提案。
【対象幼児への支援】⑦ 改善点 対象幼児が活動にふさわしくない行動を表してからやめさせることよりも、未然に防ぐ支援を行えるようにする。	対象幼児への支援	改善が必要な支援⑦ ・対象幼児の活動と異なる行動で関わる姿に、隣の幼児が戸惑う様子を見て注意する。 改善された支援⑧ ・教師とのジャンケンから幼児同士へと活動前から段階的な支援の実施。 ・他者との関わりがものを介してできる支援。 ・ジャンケンのタイミングが分かり自分で行動できる場合の実施。	改善された支援⑧ ・ルールを示したカードを対象幼児がみんなの前で読む機会づくり。 ・対象幼児と他の幼児をつなぐ支援の実施。 ・関わることの心地よさを互いに感じるための働き掛け。
【対象幼児の姿】① 改善点 自分が逃げる役になって動くとき以外は、活動への意識が続きにくく、2人組になっている幼児に押し、引っ張るなどしたいように関わっている。	対象幼児の姿	支援を必要とする姿① ・グループの幼児と一緒に活動している意識がもちにくく、互いに関わる姿が少ない。 ・活動が長くなると、活動と異なることで隣の幼児に関わろうとする。 相手に対応して取り組む姿② ・2人組になりたかった幼児とは別の幼児でも自分から2人組になる。 ・ジャンケンで負けた相手にカードを渡す。首に掛けた表示を渡して順番を交代する。	相手に対応して取り組む姿② ・担任の依頼に応じてみんなの前で文字を読む。 ・グループの幼児に聞かれたときに自分の考えを言う、グループの幼児の言葉にうなずく、ジャンケンを出すタイミングを合わせるなど一緒に活動する意識をもち最後まで取り組む。

<考察>

- ・ 対象幼児が活動にふさわしくない行動を表してから注意をする担任や支援員の支援（表3⑦）は、コーディネーターが改善点を明確にして働き掛けることにより、活動内容の段階的支援などの障害特性から表れる困難さを軽減する支援（表3⑧）や対象幼児のよさを生かす支援、対象幼児と周囲の幼児の関わり方をよくする支援（表3⑨）へと改善された。
- ・ 対象幼児の成長につながる支援改善のためには、対象幼児への「個別の支援」だけでなく「集団指導」の視点でも支援を見直すことが必要だった。
- ・ 対象幼児が他者へ関わりやすい方法と周囲の幼児の対象幼児への関わり方の両面から見直すことで、対象幼児の他者への一方向的な関わり（表3①）が、相手に対応して取り組む姿（表3②）へと変容した。

第4 研究の成果

- ・ 検証保育の考察から、開発した「支援ソフト」の活用方法の説明に「個別の支援」と「集団指導」両方の視点を持ち、バランスをとりながら支援をする必要性を加えた。
- ・ 対象幼児や学級の実態などに応じて、コーディネーターが役割を工夫することは、担任が個別指導計画を活用した支援方法を改善し、対象幼児の成長を促すことに有効だった。

第5 研究の課題

- ・ 開発した仕組みでエリア・ネットワークの連携強化とともに支援ソフトの充実を図る。
- ・ 幼児の実態に応じた支援改善につながるコーディネーターの働き掛けを更に工夫する。